

小田実全集（評論 第3巻）

日本の知識人



講談社

小田実全集

Makoto Oda

サンプル版

目次

文庫版まえがき

7

I 日本の近代化と知識人の変遷

「知識人論」の二つの典型

12

日本の近代化のゆがみ

16

日本の知識人の経歴

25

II インドの場合

インドの悲劇

38

インドの知識人

41

III 古代ギリシアの知識人像

「知識人」ということばのあいまいさ

48

知識人の三つの型

51

「ひま」と「説得」

52

「ひま」と知識人

55

「判断者」としての知識人

古典型知識人の姿勢

社会の「内」にある知識人

オモテとウラ

「喋る論理」の特徴

IV 知識人像の変遷

歴史の変遷の概観

近代型知識人の出現

古典型知識人から中世型知識人へ

「非合理なれど、われ信ず」

近代型知識人の論理

近代型知識人——西洋と日本——

V 近代化と知識人

日本における「知識人」と「非知識人」

それぞれの社会の「知識人」のそれぞれのイメージ

日本における知識人の位置

60

63

68

71

78

82

85

88

93

98

102

109

113

115

近代化のなかの学生像

「大人」と「子供」

社会に占める軍人の位置

VI 日本の知識人の状況と問題

ふたたび、インドの場合

明治維新が残したもの

「技術」を教える教育

西洋を選んで取り入れる

「喋る」西洋と「書かれた」西洋

「思想の場」と「生活の場」

体験的知識の軽視

全体原理としてのマルクス主義

「悩めるインテリ」のヘド

「実務インテリ」、「思想インテリ」

「思想の場」から「生活の場」へ

知識人が冒険する

卑下と傲慢

It is possible that...

212

VII 戦後の知識人の状況と問題

新教育の成果

216

新教育のゆがみをもたらすもの

226

「喋る論理」の擡頭

234

画一主義の風土のなかで

237

大学教育を考える

241

戦後世代の特質

252

今後の課題

261

あとがき

275

六十年代、七十年代の「日本の知識人」

277

文庫版まえがき

この本を書いたのは、文中にある通り、私の三十二歳のときで、そうだとすると、今（一九八〇年）から十六年まえのことになる。そのころ、私は一年に二冊、書き下しの本を書くことに決めていて、私のもくろみでは一冊は小説、もう一冊は評論の本であった。そして、たしかに、これも文中にも書名が出て来るが、小説は「大地と星輝く天の子」と題した、ソクラテスの裁判のことを書いた長い小説となつて終つて、さて、そのお次の評論の本が、この「日本の知識人」であった。筑摩書房がそのころ出し始めた「グリーン・ベルト・シリーズ」という新書判の叢書の一冊にたのまれて、さて、書いてみたのがこの本だが、半年ほどかかつて書いたのではないか。目黒のホテルにカンヅメにしてもらつたりして書いた（あのころのホテル代、たしか、一泊千五百円ぐらいであった）。部屋いつぱいに本を散らかして書いていて、遊びに来た友人がおどろいたことをおぼえている。本を散らかしていたのにおどろいたのだが、それ以上に「きみもこんなに本を読んで書くのか」——そちらにおどろいていた。

たしかに私はあまた本を読むたちではない。これには自己弁護（しかし、何故、弁護する必要があるのか）に便利なことばがあつて、それは西田幾太郎のことばだったかと記憶するが、もちろん、そ

んなことは一代のセキ学の冗談にちがいないが、「考えるのに忙しくて本なんか読んでいられるか」。

それに私はこの一代のセキ学がどうであつたか知らないが、本を読んでいるうちに妄念妄想雲のごとくわき上つて、とうていおしまいまで読み通すことができない——そんなことにもあまた事例があつて、とどのつまり、カードをとつて要点を書きぬいて行くような「知的生産の技術」がまことにできがたいことになる。もちろん、それでも本は読まなければならぬということも人生にはある。

「大地と星輝く天の子」という小説、ソクラテスの裁判というよりは、その裁判でソクラテスを裁いた、そのおかげで彼を死に追いやつた人びとのことを書いた小説で（べつに宣伝するつもりもないが、興味のあるむきは読まれたし。同じ講談社文庫に入っている）、そこで裁判のさまを書くことが必須不可欠になつていた。なんでもないことのようにだが、だいたいが野外でことを行なつた古代ギリシアのことだ（民主主義発祥の地アテナイの「議会」においてしかり。あの「議会」のあつたプニクスの丘というのは文字通り丘であつて、議事堂というような壮レイにしてアホらしいものが突つ立つていたわけではない。ペリクレスというような民主主義の父親みたいな人物も丘の上の岩——ほんとうにあればただの岩だ——にのつかつて大演説をぶつた。たとえば、ツキジデスが書き残してくれた、歴史に残る戦死者追悼の大演説というような）、その裁判が行なわれた裁判所にはたして屋根があつたかどうかが問題になつた。それでいろいろ本を読んだのだが、つまるところ、判らない。そのころ、ある会合の席で、田中美知太郎氏に会い、あ、これはこの一代のセキ学に訊いてみるべしと思いついて、「ソクラテスを裁いた裁判所に屋根がありましたか」と訊いた。突然のケツタイな質問に田中氏もおどろかされたようだったが、そこは、やはり、ソクラテス学者だ、しばらく考え込まれた上で、「判

らんな、そりゃ」と言われた。彼なら私を上まわる量の文献を読んでいるにちがいない、その彼がそういう以上、たしかに「判らない」ことだ、それでひと安心、「判らない」ことにおいて自信をもつて書くことができたのだが、考えてみると、学問というものの、あるいは、本を読むということ、「判らない」という事実を判るためになすわざだろう。まさにこれこそソクラテスが言っていたことだ。

ところが本を読むと、なんでも判った気になるからこわい。ことにマルクス氏の書くような偉大な本になると、それだけ読んだだけで世界のすべてが判ったようになってとりこぼしがない。すくなくとも、そんなふうのことを考えることができる。マルクス氏までとは行かずとも世の大、中、小さまざまの思想家、哲学者、評論家の本を読んでいると、それだけで世界のもろもろを解明できた感じになつてまことにころよいものがあるが、そこでもつともころよいのは、その世界での一種のキマリ文句（ひところなら、たとえば、「アンガジユマン参加」）。それから、「自己否定」。そして、今は？ たとえば、「トリック・スター」か。あるいは、身体論というような論題）で、Aがそれを言えばBがたちまちうなづくというかたちで、そのときどきの流行がかたちづくられることである。これは便利で、しかもころよいことだ。

さて、この本——あいにくなことにそういう流行とは外れている。昔も外れていたし、今も外れている。それだけはたしかだ。

(1980年2月27日)

日本の知識人

I 日本近代化と知識人の変遷

1 「知識人論」の二つの典型

「日本の知識人」をとらえる方法には、およそ、つぎの二つの両極端がある。

一つは、いわば、外へひろがる方法である。このやり方に従えば、まず確立されるのが全人類に共通普遍的な「知識人」像であつて、ついでその「日本版」を考えていこうとする。全人類は、国家、民族の差別をこえて「知識人」と「非知識人」に横割りに区分され、前者がさらに、その日本人の部分、フランス人の部分、インド人の部分といったふうに縦割りに細分される。

もう一つのやり方は、内側へむかつて収斂して行く方法である。全人類は、まず日本人、フランス人、インド人といったふうに縦割りにされ、その各々について「知識人」なるものの存在を考えようというのだ。前者がサンクロナックな方法と呼んでいいなら、後者はディアクロナックな方法である。前者はまず普遍を求め、そこから特殊に至ろうとする。後者は逆に、特殊から普遍。

もちろん、二つの方法のどちらも、純粹な私たちでは存在し得ないし、世の「知識人論」のたいていが両者の方法のあいだにあるのだが、ただ、どちらかにより接近しているということだけは言い得るだろう。そのとき、私にとって興味ぶかいのは、日本の「知識人論」がたいてい後者に接近してい

るのに対して、西洋のそれが前者に近いことである。そして、もう少しきめをこまかくして見れば、同じ西洋のなかでも、むかしから西洋文明の中心のところにとっかかりアグラをかいて来たようなフランスやイギリスのような国々ほど前者に近く、あとからその「先進国」を追いかけたロシアやアメリカのような国々では、かなり日本タイプに近い。早い話、フランスの「ク・セ・ジュ文庫」には「知識人」という本はあるが、「フランスの知識人」という本はない。サルトルが知識人の「アンガジュマン」を説くときも、知識人一般という普遍概念から出発しているのであって、「フランスの知識人」の特殊性に基いているのではないのだ。それに対して、文豪たちの小説のなかによく出て来る革命前のロシアの「余計者インテリ」は、彼らが「ロシアの知識人」であるという事実をぬきにしては考えられないだろう。アメリカの知識人もしかり。アメリカの小説の青年主人公や青年作家はヨーロッパにおもむくことによつて、「アメリカ」を発見するのだが、それはたんに「知識人」である自分よりも「アメリカの知識人」である自分を発見するということにほかならない。トマス・ウルフはそうした知識人の一つの典型だった。そして今も、アメリカ文学はもう一つのみごとな例をもつ。ジェイムス・ボールドウイン。

この事情は簡単に説明がつく。一口に言つて、フランスの知識人にとっては（普遍概念としての）「知識人」イコール「フランスの知識人」であり、あるいは逆に、「フランスの知識人」イコール「知識人」であるからにちがいない。つまり、彼らにとつては、「知識人」一般（と彼らが考えている）を論じていれば、それがとりもなおさず自分たち「フランスの知識人」のことを論じていることになり、逆に、自分たち「フランスの知識人」を考察の対象に選ばば、それはもうそれで、全世界の「知識人」のこ

とを考えたことになつてゐる。まことに便利な話である。

ロシアの「余計者インテリ」やアメリカの「アメリカ発見の若者」たちとなるとそうはいかない。彼らはいつだつて、西洋の本場フランスと自分との距離を感じ、それに悩んでいて、とうてい自分の問題を「知識人」一般の問題にそのまま拵げて考えたり、あるいは逆に「知識人」一般の問題を機械的に自分にあてはめることもできないでゐる。実際、アメリカの知識人が好んで使うことば（下手な小説や文学批評に必ずといっていいほど出て来る）に、「自分の（アメリカ人としての）アイデンティティを求める」とか「発見する」とかいうのがあるが、こんなのは、フランス人やイギリス人にとつてはまったくナンセンスだろう。彼らは自分の「アイデンティティ」など考えたことがないにちがいない。自分たちは太古からそこにいたのだと、彼らなら考える。そこ——西洋の中心、つまり、世界の中心に。

しかし、ロシアにしてもアメリカにしても、本場であろうとなかろうと、西洋の一部ではある。フランスやイギリスほどでないにしても、まだまだ、自分を世界の中心だとみなすことができる。世界のもろもろの現象を自分の尺度で裁断して行く西洋の伝統の上につかつてゐることができる。しかし、日本の場合はどうか。日本をそのうちにふくめた非西洋、つまり、好むと好まざるとにかかわらず、西洋をお手本としてあとからあえぎあえぎ追いかけるなければならなかつた、いや、今もつてそうであるアジア・アフリカ諸国の場合はどうか。

西洋の知識人は、日本の知識人を見るとき、知らず知らずのうちに「知識人」イコール「西洋の知識人」（あるいは、その逆）という便利な尺度を用いてゐる傾きがある。その尺度にピッタリと適合した、

自分そっくりのヒナ型「西洋の知識人」を発見したとき、彼らは安心し、その尺度からはみ出たものがあれば、はみ出し部分を「非知識人」的部分として片づけ去るか、それとも、問題を日本人一般にまで拡散させてしまう。一つの例は安保闘争の騒ぎのさいの日本の知識人の動きに対して、アメリカの知識人のあいだにかなり流布していた見方だろう。「やはり、日本人はわからんなあ」、あるいは、「日本人はまだまだ民主主義を理解していないな」そのとき、日本の知識人の主張は、十分に論理的なものであっても、そうした先入観によってあっさり押し流されてしまう。

非西洋、つまり、アジア・アフリカの知識人の不幸は、西洋の彼らのように自分が世界の中心に位置していない、すくなくとも彼らのように単純に中心に位置していると思ひ込めないことから始まる。したがって、ここでは、ロシアの「余計者インテリ」や「アメリカ発見の若者」以上に、「知識人」イコール「日本の知識人」（あるいは、その逆）式の単純明快な尺度は存在し得ないにちがいない。「知識人」一般を論じることによって「日本の知識人」を論じつくしたことはならないし、逆に、「日本の知識人」の問題をそのまま「知識人」一般に拡大することもできない。すくなくともそういういった意識が、日本をはじめとして、アジア・アフリカ諸国の知識人の心の底にいつもあるようだ。

いきおい、アジア・アフリカの知識人の関心は、彼らの「知識人」としての普遍性よりも、「日本の知識人」、「インドの知識人」……としての個別的な特殊性にもつばら向けられる。この場合、一つ注目しておいていいのは、「アジア・アフリカの知識人」といつた、より包括的な視点は、これまでのところ、まだまだはつきりと確立されていないということだ。

これには、まず、アジア・アフリカがいやでも西洋をとり入れなければならなかったという事情が

ある。「未開」から「文明」に一挙に突入したところを除いて、あたりまえの話だが、多くの地域で（たとえば日本やインド）は、西洋がなだれ込んで来るまえに、それぞれ知識人は存在していたのである。当時には、彼らはまさに「知識人」であつて「日本の知識人」（中国に対して、彼らはそんなふうと思つたかもしれないが）、「インドの知識人」……ではなかつたにちがいない。西洋化のはじまりとともに、彼らはいやでも西洋を自分の上に重ね合わせていかねばならなかつた。それがアジア・アフリカの知識人に複雑な陰翳いんえいをあたえる。

さらに事態をややこしくさせるのには、つぎのような事情がある。例を「日本の知識人」と「インドの知識人」にとつてみよう。まず、両者の背後に横たわる歴史、文明、文化の差は、「イギリスの知識人」と「フランスの知識人」のあいだの差よりもはるかに大きいだろう。第二に、そこへもつて来て、西洋がなだれ込んで来たときの社会の成熟の度合いのちがいがあつた。第三に、なだれ込んで来た西洋そのものの成熟の度合いのちがいがあつた。

2 日本の近代化のゆがみ

簡単に言えばこうである。日本の場合、西洋のなだれ込みと近代化、近代国家の形成は同時になされた。また、そのなだれ込みを受ける社会も、それなりにならなり成熟した社会であつた。この二つの事情の結合は日本に大いに幸いしたと見ていいだろう。たとえば、ことを新しい知識人の形成ということがただにすぎなくても、維新後のみじかい時間のあいだに、永井道雄氏という国家主義的な義務教育（ここにおいて、日本国のいわば兵士、下士官が養成される）と比較的自由な色彩をもつ上級学

校（知識人を育てる）の二本立てでよりなる日本の教育の体系が確立されたのも、背後にそうした事情があつてのことであつた。

そしてまた、そこになだれ込んで来た西洋も、すでに産業革命とフランス革命を経過した西洋であつた。明治維新直後、あれだけ「自由民権」の嵐が吹きまくつたのも、もちろん、そのおかげだつた。さらに明治維新のヘゲモニーをにぎつたのが、主として封建的身分差別が半ば崩壊したなかから擡頭して来た下級武士であつたこととあいまつて、たとえばイギリスのように露骨な階級差別（そ^{たいとう}れは、のちに述べるように「知識人」「非知識人」の区分けを明確にする）のない社会をつくり上げた。かくして二本立ての教育体系の一方によつて、才能のある人間は、身分のいかんを問わず、社会上昇のハシゴを登り、上層にまでくぐり込むことができるようになったのだが、「あれはできた青年じゃ。一高、東大をトップで出たそうじゃから、うちの三女の婿に」という考え方は、イギリスには見られない）、今もし江戸時代中期、封建的身分差別が確固として存在していた時期に西洋がなだれ込んで来たとしたら、そのようなことは可能だつたらうか。まずなだれ込んで来た西洋が、産業革命、フランス革命以前の西洋であるということがあるだろう。その西洋もまた身分差別にうらづけられた西洋であり、それは、日本がもっていた身分差別にそのままのつかり、一層それを強化したのにちがいないのだ。

それがインドの場合だつた。インドにとつて不幸なことは、言うまでもなくまず第一に、西洋の植民地になることとなつてしまい、近代国家として誕生したのはようやく戦後になつてからという事実だろう。それが「インドの知識人」に「日本の知識人」とくつきりと異なる独特の陰翳をあたえている

ようだ。たとえば帝国主義の洗礼をともに、もつとも残酷なかたちで受けた彼らは、日本の知識人ほど、西洋に夢をもてなかつた。もちろん、「自由と平等の西洋」の背後にひそむ帝国主義の存在は、維新当時の日本の知識人にもあきらかであつただろう（それが明治維新を生み出す原動力となつたこととは言うまでもない）。しかし、それにしても、日本はインドのように、その怖しき、残忍さ、狡猾さを、身をもつて体験したのではないのだ。日本の知識人はそれゆえにインドの知識人に比して、すくなくとも対西洋という点においては、比較にならないほどナイーブだつたと言つてよいだろう。彼らのナイーブさは、たとえば条約改正をはかるために、鹿鳴館時代を現出したことの一事でわかるが、より根本的には、「自由と平等の西洋」と「帝国主義の西洋」の二者が存在することを認めながら、その二つが別箇に存在するかのような錯覚にとらわれてしまつたことに認められる。眞実はそうではなかつた。二つが一つの西洋のなかに渾然一体のかたちであり、二つが矛盾なく作動したこと、それ自体にこれまでの西洋の世界制覇せいほのカギがあつた（二つのもののあいだの矛盾がはつきりした形をとつてあらわれ、二つが分離せざるを得なくなつたのは、ようやく戦後になつてからであろう）。この事實は、現実主義的な眼をもつた維新の志士たちには、読みとれていたのにちがいない。彼ら自身が、考えようによつては、「自由と平等」と「帝国主義」の双方を矛盾なく体内に持つていた（二本立ての教育体系の発案も、その彼らだからこそできたのであろう。高等教育は「自由と平等」の領域にぞくし、義務教育は「帝国主義」に対応するものであるにちがいない。二つは矛盾なく動く、すくなくとも動くべきものであつた）。けれども、時代が進むにつれて、二つの矛盾なき結合は解体する。一方は「自由と平等」の輝かしいオモテの西洋讚美の方向に進み、他方はただひたすらに西洋のウラ

の面、「帝国主義」をとりあげるようになって、西洋はあたかも善玉、悪玉のように二つにきれいに分解されてしまうのである。この分解は、日本の知識人のものの考え方に大きな影響をあたえた。

それはたとえば、彼らの対アジア観にも見られる。維新の志士に共通するのは、一日でも早く西洋に追いつきたいという理想と、その西洋の餌食になっている情けないアジアの一員であるという現実意識だろう。その二つが結びついて、日本がアジアの盟主となって西洋と闘うという考え方が生まれ来る。そのためには、まず頑迷固陋なる朝鮮、清国をうたなければならぬ——これが福沢諭吉の「脱亜論」の発想法だが、こうした考え方は、維新の志士たちに多かれ少なかれあった。

こうした「脱亜論」は、二つの方向をふくんでいる。一つは、「自由と平等の西洋」に日本もつて行く方向とする方向、もう一つは、アジアのために、「帝国主義の西洋」の申し子になる方向とする方向——二つは三国干渉のあたりまでどうにかこうにか重なっていた。しかし、そのあと、決定的な分裂が来た。

前者の方向をとる人たちの典型は知識人だった。彼らの関心事はただひたすら西洋であり、それ以外にはなかった。そして、その西洋は、あくまでオモテの西洋であった。福沢諭吉の「脱亜論」の背後には、彼のアジアに対する関心、というよりは憂慮があり、それが「脱亜論」という考え方に彼を導いたのだが、彼の「脱亜論」の後継者たちには、それはほとんど完全になかった。彼ら自身ですでに「脱亜論」の標本だった。たとえば、彼らはヨーロッパへ留学するために船にのってインド洋を渡って行ったのだが、途中のアジア・アフリカの地は、たんなる経由地としての意味しかもっていなかったようだ。口ではアジア・アフリカの現状を憂慮するというようなことを言いながら、そこで下

船し、たとえ一月でもいいからアジア・アフリカの実状を見ようとした人はほとんどいなかったのである。この傾向は今日でもつづいている。知識人をふくめて、それもアジア・アフリカ問題に関心をもつと自称する知識人をふくめて、たくさん人間がヨーロッパと日本のあいだを往来しながら、実際に途中のアジア・アフリカの地に降りてみようとする人は今もつて少ないのである。そう、今もつて、アジア・アフリカは途中であるにすぎない。

福沢諭吉にとつて、西洋は「自由と平等の西洋」であるとともに「帝国主義の西洋」だった。しかし、たとえば、永井荷風にとつてはそうではなかった。彼にとつての西洋は前者であり、もし後者があつたとしても、それは「永井氏の西洋」とは無縁に存在する、したがつて彼にとつてどうでもいい西洋であつた。彼が軽蔑する野蛮なる薩長の俗物官僚、軍人どもは後者の野蛮なる西洋にくらいいついていただろう。しかし、その西洋は、彼に言わせれば、ほんものの西洋ではなかった。潔癖で癩症の荷風氏のことだ、彼にとつて、ほんものでないものは、つまり存在しないものであつた。

日清戦争、日露戦争の勝利によつて、日本の地位が上昇していったこともある。私はいつも考えるのだが、幕末から維新にかけてヨーロッパやアメリカに留学した日本人を、ヨーロッパやアメリカの人間はどのようにむかえ入れたのだろうか。たとえば、今、アフリカのどこかの国から日本に来た留学生をふつうの日本人が見る眼で見たのだろうか。それとも、ああ、植民地の人間が来たよ、といった眼で見たのだろうか。たんなる訪問者が来た、お客が来た、というような感じではなかったのちがいない。当時の西洋人にとつては、アジアから人間が来たと言えば、彼は奴隷としてやつて来たか、さもなければ、何かを学ぶためにやつて来たのだ。幕末から維新にかけての留学生の場合、彼らむ

かえり入れる西洋人の気持には、そうしたところがあつたのだろう。留学生も微妙に、また敏感にそれに反応した。奴隷として遇されたとき、いわば彼らは西洋帝国主義と直面していた。愛すべき学生として遇されたとき、彼らのまえにあつたのは「自由と平等の西洋」であつた。

けれども、日本の地位の上昇とともに、日本の留学生はすくなくとも奴隷ではなくなつて来たにちがいない。彼らはたんに留学生であり、それゆえに「自由と平等の西洋」の使徒となつた。そこへもつて来て、訪問者、お客としての面がしだいにまして来た。同じ留学生だと言つても、森鷗外と夏目漱石とのあいだには、大きなちがいがあつた。さらに大きなちがいが、漱石と現在の留学生とのあいだにはある。鷗外の場合、一から十まで学ぶべきものとして西洋があつた。彼は青年だつた。それと同じように日本も若かつたのである。漱石の場合とはちがう。彼はすでに日本の教育によつて自己を確立した人間であつた。知識も識見もすでに十分にある学者——その彼を、しかし、西洋はたんなる学生として、自分のところに何かを学びに来た（それ以外に、アジア人がなんで西洋に来るのだ！ 彼らが行われを見物に来た？ そんなバカなことがあるか。そんな僭越なことが！）愛すべき子供として遇したのである。彼のロンドンでの憂鬱の一つの大きな原因はそこにあつた。下宿の無学のおかみさんが彼の発音を直そうとする。ドイツケンズを読んだことがあるか、などときく。なんというバカなことであるか。（「倫敦に住み暮らしたる二年は最も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。」あるいはまた、「一般の英国人よりも我々が学者であつて多くの書物を読んでゐて……或人は such a one と言ふとか such an one であるとかで議論して居た」）

しかし、時代が進むにつれ、日本の地位がさらに上昇をつづけるにつれ、そしてもちろん日本自体の近代化が進むにつれ、留学生から学生らしい面が減少し、代って訪問者、お客としての面がましてくる。彼らはもはや何かを学ぶために西洋に行くのではなかった。学ぶことならすでに日本の内部でことたりたのだ。二本だての教育体系は着々と実を結びはじめていたのである。いきおい留学生の目的は勉強そのものよりも、箔づけということになった。しかし、その箔づけの意味も、外国帰りの数がふえるにつれて減少する。それはしだいに、たんに見聞をひろめるといったかたちのものとなった。これが、少し乱暴に言えば、現在の留学生の姿である。

私は一九五八年から五九年にかけて、アメリカにフルブライト留学生として滞在したのだが、私のまわりの日本人留学生の立場やものの考え方は、アジア・アフリカの留学生のそれよりも、はるかにヨーロッパからの留学生に近いことを認めた。留学前に東京のフルブライト委員会がくれたパンフレットか何かにも、日本の留学生の場合は、他のアジア諸国の場合とちがって、ヨーロッパからの留学生と同じように、勉強そのものよりも見聞をひろめるといったことのほうが大事だという一節がたしかあったように記憶する。実際、私はアジア・アフリカからの留学生を見、彼らと知己になることによつて、維新時の留学生、ひいては維新の志士たち自身の立場なりものの考え方なり、あるいは気概なりをはじめて体得することができたように思った。

どんな家庭でも、召使に対して、その家庭の内情を包みかくそうと思つてもなかなかできたものではない。家人のほうも、どうせ召使のことだから、と言つて心を許してしまうだろう。召使に対してほどでないにしても、下宿人の学生に対しても、たとえば外からカミシモ正してやつて来た年輩の訪

問者に対してほど、見栄をつくらうって、くさい物に蓋をしろといった態度をとらないにちがいない。召使に対しては人は尊大であり、学生に対してはあけすけであろうが、訪問客に対してはインギン無礼、ひややかに他人行儀だろう。このいささか唐突な^{ひゅ}比喩は、西洋の日本人留学生に対しての態度の変化にあたってまいいか。日本人留学生の態度もそれに微妙に、また敏感に反応したと言えよう。時代が現代に近づくにつれて、召使あるいは奴隷予備軍の視点によってとらえられたウラの西洋は、日本の留学生の意識からしだいに脱落し、学生としての眼を通して見たオモテの西洋が、それだけが彼らの意識を占める。そして、そのオモテの西洋像は、彼らが学生の地位から訪問客の地位に昇格するにつれて、なま身の現実とのあけすけな接触を失って、いよいよ純化の一路をたどる。――

この比喩を拡大すれば、日本の知識人の場合となるだろう。実際にヨーロッパに渡航した人間なら、よほどのトンマでないかぎり、たとえたとえ一観光客としてではあっても、途中でアジア・アフリカの現状にふれ、そこにいくばくかの感慨をもったかもしれない。しかし、たいていの人間は、実際にはヨーロッパへ行かなかつた。彼らの西洋理解は書物によつてであり、その書物の大半は、オモテの西洋の精髓そのものであつた。典型的なのが白樺派の善良なる人たちであろう。そのなかでもとりわけ善良なる武者小路実篤氏にとっては、西洋はロダンの西洋でありゴッホの西洋であつて、たとえそれから十年以上ものちになつてもなおまだ、アメリカの大虐殺をひきおこすような西洋ではなかつた（一九一九年四月十三日、インドのアムリツァールで、イギリス軍は無防備のインド人三七九名を虐殺し、一二〇〇名を傷つけ、そのまま放置した）。この態度は大正教養主義の人たちにももちろんあきらかに見られる。彼らの指導的言論は世にもてはやされ、民衆のなかに急速に深く滲透

していった。今日でも、いぜんとしてそうした態度は知識人のあいだに強いだろう。「オモテの西洋をお手本として日本を叱りつける」(私がそうした式の小気味のよい評論を読むたびに感じることは、論者の位置である。論者がその日本のなかに自分をふくめているのかどうか気がなつて仕方がない) やり方は、たとえば永井荷風以来連綿としてあるが、今日でもそれはオリンピックをひかえてますます盛んなようだ(このごろは、それにさらに、「オモテのアジア・アフリカをお手本として日本を叱りつける」のまでがくつついたので、事態はさらにややこしく、またにぎやかである)。会田雄次氏の『アーロン収容所』という本が評判をとつたのは、オモテの西洋の裏に確固として存在するウラの西洋があげすけに書かれていたためだが、考えてみると、そこに述べられていることはまったくあたりまえのことなのである。そのあたりまえのことが異常な反響をひきおこした事実から、日本の知識人、また日本人一般の意識に定着したオモテの西洋像の強さを逆に考えることができるだろう。ちょうど、その会田氏がビルマの捕虜収容所で、ウラの西洋とむき出しのかたちで対し、それにさいなまれていたとき、故国日本では、オモテの西洋を無邪気にまた牧歌的に讚美したもろもろの人たちの言説がもてはやされていたのである(例、池田潔氏の『自由と規律』)。

日本人の意識のなかのオモテの西洋像の確立、その純粋化は、日本の近代化にとつて必要不可欠なことであつたかもしれない。近代化は、歴史のその地点での西洋の最先端をとり入れることによつて行なわれたのだが、それは、西洋においてすらまだ理想にすぎないものを先取りすることにもなつた。維新以来の日本の理想は、一口に言えば「西洋なみの日本にする」ということだつたが、その西洋は、現実の日本が現実の西洋に近づくにつれ、しだいに理想化された西洋と化して行きつあつたようだ。

これではいくら現実の日本が現実の西洋に追いついても、意識のなかでの西洋と自分との距離はいぜんとして変りはないだろう。まるで鼻のさきにぶら下げられた人參を求めてしゃにむに走るロバのようなものである。おかげで、日本の近代化はかくも急速に、かくもみごとになされた。

3 日本の知識人の経歴

大阪生まれの私が大阪から東京にはじめて出て来たとき、まず感じたのは、近代都市としての東京の古さであった。古いということはそれだけ不便だということだ。こと近代的な設備に関するかぎり、あとから近代都市としてスタートした大阪は、東京よりもある点ではより近代的で便利だった。同じことを、アメリカやヨーロッパに行ったときに、より拡大されたかたちで感じた。つまり、そこには今さつき述べたように、日本が西洋を真似するとき、それをその最先端のかたちで、いや、ときとしては現実ではなくて理想において真似たという事情が伏在しているのであろう、私にとってときとして、本場の「西洋の西洋」は「日本の西洋」に比べて、古めかしく不便であった。もつと極端なことを使って言えば、西洋的でなかった。

この西洋の最先端の先取り、あるいは理想の先取りは、すでに明治初期の民権論者のものの考え方の中にはつきり読みとることができる。彼らは民権伸長をアジアの民族解放と結びつけてとらえ(日清提携論から、それは、頑迷なる清国をうたなければならぬという侵略的イデオロギーに容易に転化した)、そのうちのある者(植木枝盛)は世界政府の設立さえもくろんだのだが、資本主義とナショナリズムの結合の上に帝国主義を謳歌おうえかしていた当時の西洋にとって、そうした考え方はたんなるユー

トピア論者の白昼夢にすぎなかつただろう。西洋にももちろんそうしたユートピア論者はいたが、彼らの場合、その背後には、たとえばナショナリズムの弊害についての彼らのそれまでの苦しい体験があつた。日本にはそれはなかつた。いや、近代的な統一国家として生まれたばかりの日本には、ナショナリズムそのものでさえが、「自由民権」の觀念とともにまだ生まれたばかりのものであつた。ナショナリズムがほとんどまだないところで、ナショナリズムの悪を説いたところで、それが説得力をもたないことは言うまでもないだろう。それに、生まれたばかりの近代国家は、そのとき、強力なナショナリズムを必要としていた。外からの西洋帝国主義の脅威とそれに触発された強固な統合への要求——この二つが強力なナショナリズムを必然なものとし、民権論者の甘いユートピア的インターナショナルリズムを吹きとばした。松田道雄氏が指摘するように、板垣退助の転向は、この意味で重大であろう。彼は時の政府から金をもらつて「欧州漫遊」をするのだが、そのとき彼は「自由と平等の西洋」が中国人に対してどのような態度をとっているかを、自分自身の眼ではつきり見たのだった。

歴史を見てみると、ことに日本の近代史を見ると、まずはなやかな理想の時代、あるいは理想の先取りの時代があり、それがついで意地悪な現実によつて、あるいはまたその現実をよりどころとする人たちによつて、手ひどい攻撃を受けるといったことがくり返し行なわれて来たように見える。「逆コース」は、いつでも現実の理想へのまき返しというかたちで起つて来る。維新後の民権論の時代から日清、日露戦争のナショナリズムの時代への移行と、戦後から今日に至るまでの時代の変化が、その典型的な例だろう。どちらの場合にも西洋の理想の先取りが行なわれ（インターナショナルリズム、非武装、世界国家）、どちらの場合にも、現実の手ひどい反撃に出会つた。そして、民権論がナショ

ナリズムに論壇での場所をゆずったように、今日もつともはなやかに、またさかんに論じられているのはナシヨナリズムなのだ。

この理想の先取りはマルクス主義に対しても見られるだろう。マルクス主義は、一口に言うとおモテの西洋の原理によってウラの西洋を打ち倒そうとしたものだが、それが実現された現実のかたちにおいては、ウラの世界的なところを多分にもっていたことは否めない事実である（ストーリーニズムの世界）。実際、そのことが、のちになって、多くの西洋のマルクス主義者、マルクス主義同調者を脱落させて行った原因になるのだが、日本の転向者の場合は、原因はまず官憲の弾圧であり、それを直接的契機とした「日本への回帰」（それはたとえば「一国社会主義」の巧妙なかたちをとる。例、水野成夫、佐野学、鍋山貞親）であって、ソ連の政治への幻滅感からではなかった（コミンテルンへの不信感があっても、その不信は直接的にソ連の政治へは向けられていない）。西欧から実際にソ連を訪れた知識人のなかに、その政治体制に強い批判を示したり、あるいはそれを契機として共産主義そのものから離れてしまった人がすくなくもいるのに、日本にはそうした人物はほとんど見られなかった。西欧知識人の背後には民主主義とリベリズムの伝統があり、彼らはその上にのつかって世のもろもろ、たとえばソ連の政治なら政治を大観することができたのだが、日本の知識人にはそんな便利な展望台はなかった。少しはあったかもしれないが、たいした高さではない、白樺派の連中や大正教養主義のおえら方には、それはたいした高さをもつたものにみえて、のほほんとしてそこにのつかっていられたのだろうか、もう少し感受性の強い人間ならそうはいかない。彼らは荒涼たる地上にいて、ただ一つ理想の高峰としてソ連を見上げていたのだが、なにしろ身は地上にいてはるかな高みを見上

げているのである、高峰のなかほどのあたり雲がかかっている、どこまでがほんとうに現実であるのか、どこから上が自分の幻視にすぎないのか、さだかでないのであった。独ソ不可侵条約、ポーランド分割は、親ソ的、親共産主義的な西欧の知識人に決定的な打撃をあたえた事件だが、すでに日本の左翼勢力がほとんど完全にぶつぶざされていたこともあって、それに対して、日本の知識人はそれほどの反応を示さなかった。つまり、その事件は良心的な知識人に転向を強いるほどの事件だったのだが、日本の知識人たちはすでにそのまえにたいてい転向を完了してしまっていたのである。いや、そのとき、日本の左翼勢力の活動が安泰だったとしても、彼らは西欧の知識人ほど敏感に反応したかどうか——戦後になって公表された転向しなかった人たちのその当時の言説を読んでもみると、答はおおむね否である。このことは理解できる。彼らがもし理想の高峰に疑いをもつて、それに尻を向けたらどうなるのか。彼らのそばには、転向した西欧の知識人がもっていたようなリベラリズムという便利な展望台はなかったから、ファシズムの泥沼に足をすくわれてしまっただろう。彼らはいやでも不感症にならざるを得なかった。ときには、目前の事態になんらの反応も示さないという思想の動脈硬化によって、彼らは自らの「非転向」を護った。この西欧の理想と現実の混同ということは、逆の陣営の日本の知識人にも見られたことだったろう。今度の理想の高峰はナチ・ドイツだった。ナチ・ドイツがソ連と手を結んだとき、「複雑怪奇」という一語を残して総理大臣の職を降りた平沼騏一郎氏は、むしろ、逆の立場で打撃をうけた西欧の知識人に似ていた。ナチ・ドイツの心酔者は、そのニュースを、その一瞬前まであり得べからざることだと思っていたのに、当然のこととしてしずかに受け入れた。どつちにしろ、わしらの信頼するドイツのことだ、まちがいはない——なるほど、その通り、や

がドイツ軍はソ連に侵入を開始した。

時代と話をもとにもどそう。はなやかな理想、あるいは理想の先取りが意地悪な現実によって打撃を受けるということだ。維新後のオモテの西洋の心酔は、やがて、三国干渉というウラの西洋があまりにも露骨に顔を出した事件に出会わなければならなかった。「自由と平等の西洋」だって？ ふん、顔を洗って出なおして来い。実際、多くの人々が顔を洗った。つまり、「転向」したのである。あるいは、すくなくとも、徳富蘇峰のような人にとっては、民権論者から超国家主義への大ジャンプの口実をあたえた。

維新から今日に至るまでの歴史は、日本人の意識のなかでのオモテの西洋とウラの西洋の主導権争いの歴史であったと見ることができる。たとえば、三国干渉によって、ウラの西洋は大きく人々の心にクローズ・アップされた。しかし、それから五年後の日英同盟の成立は、同盟そのものはイギリス帝国主義と日本帝国主義の握手というウラの西洋とウラの日本との結合にほかならないものだったが、人々の意識の中では、オモテの西洋のきらびやかな復活であった。西洋のなかの西洋、紳士の国イギリスに同盟国にしてもらえらるとは——日章旗とユニオンジャックがあちこちでひるがえり、シャンペンがぬかれた。そこで声高に言われたことば。「これで日本も西洋なみになった」

そのとき、そのことばのなかにある「西洋」とは、真実のところはどうであれ、あくまでオモテの西洋だったのだろう。紳士の国イギリスというオモテの西洋と手をくむことによって、野蛮なる田舎国ロシアというウラの西洋の野望を阻止する——日露戦争はもっぱらそのように人々によってとらえられ、本来なら戦争反対にまわるべき人々の多くが積極的な戦争支持にまわった。その結果、ロシア

帝國主義と、イギリス帝國主義をうしろだてにした日本帝國主義との鬭争であつたという日露戦争の一つの側面（誤解のないようにつけ加えておこう。日露戦争はそうでない側面ももっていた）が無視されてしまつた。

日露戦争から大正時代にかけてが、オモテの西洋が主導権をにぎつた時代であろう。白樺派の西洋讚美、大正教養主義、大正デモクラシー、世の中のリベラルな雰囲気、反軍國主義気分——しかし、その底では、ウラの西洋が徐々に勢いをもり返して来ていたのだ。

今度の場合、その復活をもたらしたものは、三国干渉のように直接的な外からの脅威きょういではなかつた。むしろ国内事情だつた。日本の資本主義を基礎とした政治体制が、その矛盾、悪を露呈するまでに成熟して来たのである。大逆事件が起つた。第一次大戦は好景氣を一時的にもたらしたが、そのあとすぐ米騒動がつづく。ロシア革命。シベリア出兵の失敗。さらに不況はつづき、各地でストライキが続出。……このような状況を一つの視野の下に見通す手段として、そのころ急速に日本の社会にひろがって行つた社会主義、マルクス主義、無政府主義などの急進思想が有効に働くことができた。そのメカネを通して見れば、そうしたいわばウラの日本の動きはウラの西洋の動きと大きなかわりありをもつていた。このようにして、日本の社会の「めざめた人」たちは、今一度、西洋帝國主義というものを、新しい視点で、つまり、日本の資本主義、帝國主義と結びつけたかたちでとらえようとした。その努力はある程度成功した。しかし、弾圧の激化と日本の資本主義の後進性それ自体が、「一國社会主義」の方向に運動をもつて行つたのだらう、西洋は西洋、日本は日本、というあまりみりのない結論がそこから生まれて来た。この結論は、その後、二つの経過をたどる。

一つの経過は、佐野学氏、鍋山貞親氏の場合のように一国社会主義者から天皇制政府のイデオログとなり（「私は一切の私を断滅して慕然天皇に帰一し奉る」）、偏狭な民族主義者となって（「嘗つて私等の唱へた階級本位の考へは民族の前に打ち碎かれました」）、大東亜戦争の積極的協力者となる（「私は戦争を肯定し讚美する」）道だった。この道は、ウラの西洋を拡大解釈することから出発した右翼イデオログの道に通じていた。

もう一つの経過は、日本での闘争を、外国での人民の闘争と切りはなして、別箇に孤立したかたちでやろうとする態度が生まれて来たことである。たとえば、昭和十年代のヨーロッパの人民戦線に刺戟されて日本でもおこった人民戦線の運動は、ほとんど国際的な連帯をもたないで終つてしまつたかのように見える。もちろん、すでにそうした連帯がたいへんにむづかしいものとなつていたことも事実だが、それにしても、今少し、連帯がもてなかつたものかどうか。

これが「めざめた」人たちのその後の経緯だとすれば、一般のめざめざる民衆の場合はどうか。急進思想のメガネをもたない彼らに対して、右翼イデオログはウラの日本とウラの西洋を、自分に都合のいいかたちに変形しながらとり上げた。ウラの日本はたとえば「君側の奸」であつた。それはテロによつて、クーデタによつてとり除くことができる。あとは？——あとは、彼らの関知することではなかつた。「大御心に帰一」しさえすればよかつた。アメリカやイギリスやフランスはただひたすらにウラの西洋であつた。ソ連もまたべつのウラの西洋だつた。西洋は日本を狙っている。それはかなりな程度事実だつた。彼らはその事実の上に、彼ら自身の帝国主義の存在理由をうちたてた。満州事変が始まり、そして、はてしない泥沼に日本全体がひき入れられて行つた。

彼らを一貫してつらぬく哲学は一つある。それは、西洋はつねにウラの西洋であり（例外として、ナチ・ドイツが考えられた）、いつでもアジアの圧迫者としてたちあらわれて来るという考え方だろう。つまり、西洋は帝国主義的イデオロギーと、そのイデオロギーを現実のものとする武力との結合であり、それ以外の何ものでもなかった。その結合の背後に、ふしぎなことに、「自由と平等」のオモテの西洋が矛盾なく裏うちされているのを、彼らはもはや認めなかった。これは、輝かしいオモテの西洋の信奉者とても同じだろう。近代日本の一つの不幸は、知識人層がオモテの西洋の信奉者とウラの西洋の信奉者とに分解して、そのあいだに橋がかけられなかったことにある。知識人層のなかで高級な人たちは（西洋的意味において「知識人」の名に値する人たちは）は主として前者にぞくし、後者の人たちは、むしろ、「サブ・インテリ」の階層にぞくする人たちであった（軍人、ちまたのオピニオン・リーダー）。この区別が知識人のなかの横の区別ではなくて、縦の区別であったことに注意したい。知識人層のなかで、オモテの西洋とウラの西洋をめぐって、一種の階級分化が行なわれたのである。二つの意見は、横向きに、共通の場で噛み合わなかった。二つの階級はそれぞれに通じるだけの言語で語った。一方はいばり、他方はいわばクーデタを計画し、それは成功し、前者の人たちも、いつしか後者と同じになった。

そのとき、前者、後者をふくめて人々がウラの西洋にたちむかおうとするとき、考えられる方法は二つあっただろう。一つは、自分のもっている価値体系を絶対視することによって、西洋に対する自分の精神的優位を主張すること、もう一つは、西洋の帝国主義と武力をわがものとする——インドに許されたことは前者だけだった。後者を可能にする客観的条件は何もなかった。インドの知識人

は、たとえば、ただウパニシャッド哲学をもち出して来るよりほかになかった。その態度は今日もつづいていて、インドの知識人をつき合いがたいものとする原因の一つをかたちづけている。

日本の場合はどうか。もちろん前者があつた。時代が戦争に近づくにつれ、それはしだいに大きく表面に躍り出て来た。しかし、全般的に見れば、後者がまずあり、それに日本的いろどり、アジア的いろどり（その二つは、たいていの場合、無批判に同一視された）をあたえるものとして前者があつた。まず日本が独立国であるという事情と、日本の資本主義の急速な発達、前者に安易にたてこもることを（インドの知識人の精神的優位の主張には、いつも、どこかに安易さがつきまといっている）許さなかつたのである。それともう一つ、日本の知識人が、過去の文化遺産に対して、インドの知識人ほどの自信を持てなかつたこと、それがある。

敗戦は、ウラの西洋の信奉者とオモテの西洋の信奉者のそれぞれの位置をもう一度逆転させた。ふたたび、オモテの西洋が陽の目を見たのである。この逆転はあざやかであつた。そのあまりなあざやかさと（一夜にして百八十度転回である）、逆転が自発的なものではなくて（これまでの主導権争いは、ともかくにも自発的なものであつた）、他からの強制によつた点で、これは一つの大きな特徴をもつ。ただ、ここで強制と言つても、暗い、陰惨なそれではなかつた。「強制による解放」と言つた感じであつても、そのことばの力点は、むしろ「解放」にあつた。強制があつたとしても、それはそうした強制であつた（この点から、憲法をめぐる論議の中で、それが「押しつけ」であるかどうかという議論ほど、無意味なものはない。「押しつけ」であつたとしても、国民はそのときそれをそんなふう感じていなかつた、けつして強制によつてそう感じていなかつたのでもなく、またたんなる無知によつて

そうなっていたのでもない)。

それがどれだけあざやかなものであったかという点、敗戦のとき、私は中学一年生であったのだが、つい一週間前、にくむべき「鬼畜米英」の所業について語った同じ口から、「民主主義とヒューマニズムの使徒アメリカ、イギリス」といった意味のことばが出て来たのを経験したのである。しかも、その二つのことばを一週間の間隔を置いて語った口の持主は、私の尊敬すべき教師であった。

この現象は社会の各層で見られた。アメリカの民主主義、ヒューマニズム、個人主義、開拓者魂、アメリカ的生活(つい先日まで、それは人類の墮落の象徴であった)についての讚美の文章がくり返して書かれ、本が出された。イギリスについても同じだった。イギリスをもつぱらそのオモテの面から論じた池田潔氏の『自由と規律』がベスト・セラーになった。誰もが西洋の立派さを語り、誰もが、もはやそのみにくさを語らなかつた。ここでまたもや行なわれたのは、西洋の理想の先取りであり、理想と現実の混同であった。今度の場合、外部からの意識的な手が働いているだけに、その混同はいっそう完全であった(ただ、現実生活の面で、占領軍であるアメリカ、イギリス、オーストラリアなどの西洋の軍隊の存在を通して、人々は西洋がそれほど理想的なものでないことをいやおうなしに知っていた。その体験は、しかし、多くの場合、個人的なものにとどまり、それをもとにして新しい「西洋論」が書かれたことはなかつた。またそれはとうてい許されることでもなかつた。ただ、それが今日まで書かれていないことは、惜しいことであり、大いにふしぎでもある)。めいめいがおよそ勝手なイメージを西洋に抱いていた。巨大な象をメクラがよつてたかつて撫でている図を想像すればよい。ある人々にとっては、西洋はすべて進歩的なものの象徴だった。他の一群の人にとっては、西洋は、

日本の混乱した戦後の社会とはちがった秩序と落ちつきのある西洋だった。前者のイメージを抱く人は、後者に比してはるかに数多かつただろう。最初のころの占領軍の政策は、そのイメージを形成させた。しかし、やがて、国際情勢の変化とともに、占領軍の政策に変化がおこり、それとともに後者のイメージも優勢となつて行く。というよりは、それまでなんということもなく一つにとらえられていた西洋のなかに大きく区分けをもうけて、進歩的な西洋とそうでない西洋、保守反動の西洋に分けて考えようとする態度が生まれて来る。それは、さつきも述べたように、理想の先取りのはなやかな時代のあとにはいつだつて現実のまき返しの時代が来るのだが、その時代の到来と軌を一にしていた。最初の打撃は占領軍による二・一ゼネラル・ストライキの禁止であつた。それは、ある意味では、「三國干渉」があたえた打撃に似ていた。それによつて、占領軍は解放軍であり、つねに進歩的勢力の味方であるという幻想は破れた。つまり、占領軍は、変動、混乱、革命よりも、秩序、現状維持を重視するものであることが示されたのである。すくなくとも、そうした効果を、少なからぬ人々の心のなかにうえつけた。そのことは、つぎの小さな挿話が象徴的に語つてくれるだろう。私自身の挿話である。二・一ゼネラル・ストライキ禁止のとき、私は中学一年生だった。その中学の幼き共産主義者たちは（その動きに対して、教師たちはただらうたえて何ごともなし得なかつたことを、私はいま興味深く思い出す。しかし、それから教師たちが自分の権威をとり戻すまで、わずかな時日しかかからなかつた）ゼネラル・ストライキの意義を声高に説いてまわつていた。教師たちは沈黙を守つていたが（彼らもまたストライキに入ることになつていた）、そのうちに一人、初老の国語の教師で、ストライキなどできるはずがない、秩序を重んじるアメリカが禁止するのにきまつていると、私たちに説く人

がいた。私も幼き共産主義者たちとともに、その教師のことは、きわめてシニカルに私たちの耳にひびいたことばを信じなかった。私たちにとつて、アメリカは進歩を重んじるアメリカであつて、腐つた秩序を重んじるアメリカではなかつたのである。それゆえに、アメリカ占領軍がゼネ・スト禁止の命令を出したとき、私は自分のアメリカへの信頼が一瞬にして崩れ去つたように感じた。というよりは、アメリカに裏切られたといった感じをもつたと言つたほうがいいかもしれない。それまで私たちは若者の味方だつたアメリカが、一瞬にして、その国語の教師たち老人の味方になつた——そうした感じだつた。

そして、アメリカの理想の先取りへ徹底的な打撃を加えた朝鮮戦争が来た。「警察予備隊」という憲法違反の軍隊の創設、レッド・パージ、「逆コース」のあからさまな開始——ふたたび、「帝国主義」ということばが、西洋について用いられはじめた。アメリカは今や「自由と平等」の戦士ではなくて、保守反動、平和の敵、帝国主義の権化だということになつた。

こうした動きは、知識人をべつの一方の極の一方的な讚美に追いやることになる。アメリカが「平和の敵」だということになれば、自動的にソ連は「平和勢力」だということになる。ここでまたまた見られたのは、理想化であり、理想の先取りだろう。そのころ、私は大学で古代ギリシア文学を専攻していた。そのことだけで、「おまえは保守反動だ」と言われたことがある。「ソ連でもギリシア文学はさかんだ」私はデタラメを言つた。相手は「ふうん」とまことに感嘆したように見えた。

この状態に大規模に終止符を打つたのは、国内的に言えば日本共産党が闘争方針を変更し、火焰ピン闘争に参加した若者たちを「極左冒険主義者」、「トロツキスト」と片づけ去つたことだつた。国外

的には、スターリンが死に、やがて始まったフルシチョフによる雪どけ時代、そしてスターリン批判だった。どちらも共産党の無謬性という神話の崩壊だが、それは考えようによつては、理想としての西洋の崩壊だと見られないこともない。すでに世界は、ただ西洋のみの世界ではなくなつていた。アジア・アフリカの新興国はそれぞれの歩みを始めていたし、そこには、何にもまして、新中国の誕生という偉大な業績もあつた。もはや世界は西洋のみではない——そのあたりまえの事実を現実のものとして体得できるところに、時代はようやく達したのである。

そこへもつて来て、日本自体の国力の回復、それにつぐ自信の回復ということもあつた。いや、その回復は「回復」ということばの意味するものをはるかにこえて来たのだろう。「西洋なみの日本」が、かなりな程度、実現して来たのだ。新しいナショナリズムの時代が始まる。そして、それは、まだ続いているのだろう。

つづきは製品版でお読みください。